文学および社会における「近代」
－インターカルチャー的観点からみた－

Intercultural Study of Modernity in Literature and Society

総括研究員：植和田光晴
分担研究員：石川　實　北野雄士　木村英二　中村茂裕　山元哲朗

1999年度に完結される標記の綜合テーマについて、この一年（1998年度）に各研究員が進めるべく申請し受理されたそれぞれの研究課題は、年度始めの研究会においてあらためて全体で了解され、その具体化と定例研究会での発表の手順の概略が合意・決定された。ここで合意された年間の計画の日程は、以下のように実行された。なお、次年度に向けては、多岐にわたる個別的研究テーマが、最終的に一つの共通項によってあるいは一本の基軸を共有することによって統一性のある構成体として集約されるために、各研究員は「インターカルチャー的」（intercultural）というテーマの限定的条件にいっそう留意することが必要であると考えられる。

1998年

5月26日：［発表者］植和田光晴［テーマ］『宮澤賢治作品論の構想（続）— 「雨ニモマケズ」論争その後』

6月23日：［発表者］北野雄士　［テーマ］『横井小楠における儒教と対外政策論』

7月28日：［発表者］中村茂裕　［テーマ］『凝視される都市』

9月29日：［発表者］木村英二　［テーマ］『ブレヒトの表現主義批判について』

10月27日：［発表者］石川　實　［テーマ］『フリーメイソンについて — 成立・発展・挫折』

11月24日：［発表者］研究員全員（特別参加：神崎ゆかり氏）
［テーマ］産研叢書⑽『文学と社会における「近代」』合評 — 挑発としての自己批評 —

12月15日：［発表者］山元哲朗　［テーマ］『ヘルダーリーンと伊東静雄について』

1999年

3月23日：［発表者］北野雄士　［テーマ］『横井小楠と福沢諭吉の文明観と対外政策』

上記のうち、11月24日の定例研究会のテーマについてとくに付言しておきたい。「合評」の対象である「産研叢書」⑽　は1998年6月10日に発行された。これには、現研究会の研究員多数の研究成果が収載されている。現研究会の綜合テーマは、この「産研叢書」⑽の成果の発展的継承を期して設定されたものである。いまや客観的に見ることが可能になったそれぞれの過去の成果を積極的に自己評価しながら、しかもそれを全体のなかで批判的に位置づけておくことは、今後のそれぞれの課題の追求にとって有益かつ不可欠であ

るとして、このテーマが企画された。現在の綜合テーマが一つの成果へと集約されるとき、この試みが生かされることを期待したい。

以下に、研究会で発表したテーマの、発表者自身によるレジュメを列挙（五十音順）して、中間報告とする。

植和田光晴：宮澤賢治作品論の構想(続) ― 「雨ニモマケズ」論争その後 ―

昨年度は、谷川徹三と中村稔の間に闘わされたいわゆる「雨ニモマケズ論争」を概観した。中村氏はこの論争のほぼ四十年後（1993）の評論集『宮澤賢治ふたたび』で、この問題に対する関心の深さを改めて表明している。中村氏は、先の論争で「とるにたらぬ作品」であるとして全面的に否定した「雨ニモマケズ」の評価を、ここでは逆に、「希有な、独創的な」詩であるという肯定的評価に転じている。一見、全面撤退ともみえるこの修正にはしかし、なお強い留保が付されていることは、見過ごされるべきではない。論者は「ジャンル論」に基づく論議の継承の可能性を探った。（1998年５月26日発表）

石川　實：フリーメイソンについて ― 成立・発展・挫折

18世紀はエゾテリズム思想の復活の時代である。フリーメイソンがイギリスからフランスに渡ると、この結社の啓蒙思想に飽き足らぬ人達は、秘教的メイソンを発展させる。これがドイツに伝わると聖堂騎士団の継承者を名乗る「厳守派」の設立となるが、一方ではラディカル啓蒙主義結社「イルミナーティ」が力を伸ばす。リヨンの神秘主義者の「イリュミネ」結社は「厳守派」に帰属するが、やがて独立する。これらの諸派は1782年、ヴィルヘルムスバートのフリーメイソン大会で指導権を巡って争うが、勝利者はなく、フリーメイソンの盛期は終わる。（1998年10月27日発表）

北野雄士：［１］横井小楠における儒教と対外政策論
［２］横井小楠と福沢諭吉の文明観と対外政策

［１］本発表では横井小楠の儒教思想と対外政策論の関係を考察した。小楠の対外政策論は、民衆の豊かで平和な生活を内容とする「仁」の思想を国際社会に拡大したものであり、その原理は「天地仁義の大道」と表現されている。小楠は、日本が富国強兵によって国力をつけて平和な国際秩序を維持する役割を果たし「天地仁義の大道」を実現することを期待した。（1998年６月23日発表）

［２］本発表は横井小楠と福沢諭吉における文明観と対外政策の関係を比較したものである。相違点としては、小楠が絶対的に妥当する「仁」という文明観から対外政策を導いたのに対して、諭吉が日本の国民的独立を文明の目標として条件的善と考えられる対外政策を提案したことが、共通点としては、それぞれの目標の実現に寄与すれば時勢の変化に即応して対外政策を変えてもかまわないという柔軟な発想をもっていたことが挙げられる。（1999年３月23日発表）

木村英二：ブレヒトの表現主義批判について

本年度は、ブレヒトが先行する演劇に対してどのような批判を行なったかを、彼の日記や手紙、劇評、また作品そのものなどによって跡づけた。その要点を一言で述べるなら、自然主義のイリュージョニズム批判と表現主義のイデアリズム批判である。とりわけ表現主義批判は1910年代の後半から展開されており、戦争や革命に「遅れてきた青年」であるブレヒトが、第一次大戦直後一大ブームを巻き起こしていた表現主義に対して距離を置くことによって、彼の言う「古典的な形式」としての「叙事的演劇」に到達したことが明らかになった。（1998年９月29日発表）

中村茂裕：凝視される都市

昨年度から継続して、「文学における都市」をメインテーマとした。今年度は、日本の都市と西欧の都市、なかでも特に江戸とベルリンを中心に、

１）空間としての都市

２）視覚の対象としての都市

という観点から考察を行なった。１）では、ストリート・広場・家などを手がかりにし、２）では、諦視・凝視・のぞきなどを手がかりとして、都市を考察した。（1998年７月28日発表）

山元哲朗：ヘルダーリーンと伊東静雄について（続）

伊東静雄の詩、就中「わがひとに与ふる哀歌」にみられるヘルダーリーンの影響は、わが国の多くの文人・研究者等の一様に認めるところである。静雄は非常に強い親近性を抱きながらヘルダーリーンに対決を求めた、と云えよう。そしてその後ニーチェに対しても対応を求めた。ヘルダーリーンは神の生を信じたが、ニーチェは神の死を確信した。静雄はこの対蹠的な二人の詩人から、神の生に詩の領域を、神の死にニヒリズムをみたのではないだろうか。ヘルダーリーン唯一の悲劇「エムペードクレスの死」（第三稿、未完）との比較・考察を中心に捉えながら、さらなる検証を試みたい。（1998年12月15日発表）